

## パウル・クレーの絵画「アド・マルギネム」と武満徹

石 野 眞

Makoto ISHINO: A Study of Toru Takemitsu's Critique on Paul Klee's "Ad Marginem"

作曲家・武満徹は20歳の若き日に美術雑誌『アトリエ』に「パウル・クレエの音楽」と題してパウル・クレー絵画の「アド・マルギネム」を取り上げて執筆した。武満徹の創作活動初期に流れるパウル・クレーへの傾倒、作曲における絵画性の曙光について考察し、武満徹のパウル・クレーの絵画「アド・マルギネム」の記述について研究する。

クレーのパウハウスにおける教育ノートとクレーの作品についての継続研究である。

キーワード：パウル・クレー 武満徹 アレキサンダー・クレー エドガー・ポー カンディンスキー

### I はじめに

武満徹氏は21歳の若き日にパウル・クレーの作品について、瀧口修造氏の口添えで美術雑誌『アトリエ』にパウル・クレーの絵画「アド・マルギネム」について「パウル・クレエと音楽」と題して執筆した。月刊誌「アトリエ」1951年・昭和26年6月号。

武満徹氏の初期創作作品の代表となるピアノ曲「二つのレント」が発表されたのが昭和25年の12月、昭和26年の1月にNHKラジオ「現代日本」の時間で藤田晴子のピアノで放送され、作曲作品が初めて電波に乗った年に「パウル・クレエと音楽」は執筆されたことになる。

「パウル・クレー」の表記について、武満徹氏は「パウル・クレエ」と記述しているので武満徹氏の引用文では、そのまま「パウル・クレエ」と記述し、その他については、今までの拙論表記のとおり「パウル・クレー」と表記し、以下に敬称を略す。

本稿では、武満徹のパウル・クレーの絵画「アド・マルギネム」の作品解説について考察し、研究

を続けながら、クレー作品「AD MARGINEM」の解説として拙文を構想する。

筆者は、昭和47年の島根大学教育学部紀要「Paul Kleeの“Padagogisches Skizzenbuch”について」以来、パウル・クレーのパウハウスにおける教育ノートの研究を続けている。昭和51年には、文部省在外研究員として、1年間スイスでの研究生活を持った。チューリッヒのペスタロッチ教育研究所客員教授としてペスタロッチ教育学における美術教育の研究に従事、スイスの精密産業を背景とする高度な印刷技術によって高められたスイスのグラフィックデザインの研究にも多くの実りを得たが、終わりの2ヶ月間に首都ベルンのベルン美術館客員研究員として、ベルン美術館の膨大なクレー資料によりパウル・クレーのパウハウスでの教育ノートの研究とバーゼル美術館での「アド・マルギネム」、スイス各地をはじめとするヨーロッパの美術館でクレー作品と美術の古典作品の鑑賞が出来た。

また平成9年の島根大学教育学部紀要「パウル・クレーのプリミティブ」では、パウル・クレーの造形思考と造形表現における「プリミティブ」に

ついて、浜田市世界こども美術館創作活動館の開館ならびに開館記念展『こどもたちのパウル・クレー展』の意義について述べるとともに同展に寄せて来日されたアレキサンダー・クレー氏が祖父パウル・クレーの造形表現について述べた講演に基づいて、パウル・クレーの造形思考と造形表現にあるプリミティブ性「パウル・クレー・プリミティブ」について研究した。

本稿は、武満徹氏のパウル・クレー論、その絵画と音楽について、武満徹氏の創作活動初期に流れるパウル・クレーへの傾倒、クレー作品の根底を鋭く見つめる洞察力、作曲と絵画性、その曙光について留意し考察、研究した拙論「武満徹のパウル・クレー絵画と音楽」—平成12年12月・島根大学教育学部紀要・第34巻（人文/社会科学編）の継続研究である。

## II 題名「AD MARGINEM」

武満徹は、「パウル・クレーと音楽」と題して、クレーの絵画作品「AD MARGINEM」に寄せて書いた。

この作品のパウル・クレーによる題名は「AD MARGINEM」でスイスのバーゼル美術館所蔵。常設展示作品ではないので多くの収蔵品と展示スペースからいつでも見ることができないのは残念である。

「AD MARGINEM」は「欄外に」の意のラテン語である。

クレーの作品は、日本の美術・図画工作の教科書でゴッホやセザンヌ、ピカソやマチスよりも多く掲載されているが、なぜかクレーの画集の多くにこの作品「AD MARGINEM」は掲載されていない。

片山敏彦のテキストにより、ハーバート・リード、ヴィル・グローマン、マルセル・ブリヨンのクレー研究が紹介された1959・昭和34年刊行の世界美術7・みすず書房「クレー」、そしてクレー画集の決定版ともいえるヴィル・グローマンの世界の巨匠

シリーズ「クレー」井村陽一訳・美術出版社1967・昭和42年\*原著Will Grohmann, Paul Klee, New York, 1967も「AD MARGINEM」を掲載していない。

しかし、この作品は平成14年1月に発行された検定済みの高等学校美術の教科書「高校美術2—日文・美II・34頁～35頁に「芸術と発想・クレーの創作」として大きく掲載され、35頁に「アド・マルギネムにて」の題名のもとに一インク・水彩・ワニス 43.5×33.0cm 1930パウル・クレー・バーゼル美術館・スイス—として美しい色彩で紹介されて広く親しまれるものとなっている。

ここに「AD MARGINEM」の題名訳と作品の記載図書、画集について記す。

- \* 「欄外に（アド・マルギネム）」1930・厚紙・水彩・インク・ワニス上塗り」
  - ・「クレー」世界の名画23・中央公論社・昭和48年・1973・41頁
  - 作品解説・西田秀穂・118頁
- \* 「アド・マルギネム」バーゼル美術館所蔵
  - ・「造形思考（上）」パウル・クレー/土方定一・菊盛英夫・坂崎乙郎共訳/新潮社・1973・120頁
- \* 「アド・マルギネム」バーゼル美術館所蔵
  - ・「クレー」・新潮美術文庫50・1985・新潮社
  - 作品解説・大岡信・「幻想と覚醒—クレーの人と作品」19頁
- \* 「アド・マルギネム」バーゼル美術館所蔵
  - ・「クレー」現代世界の美術13・編集委員・中山公男・東野芳明・大岡信、責任編集・千束伸行、執筆者・千束伸行・浅田彰・集英社・1985
  - 39頁
- \* 「アド・マルギネム・1930年・35年・36年・厚紙・水彩・インク・ワニス上塗り」
  - ・「クレー」ヴィヴァン・25人の画家・第21巻
  - 講談社・1996年
- \* パウル・クレー「マルギネムにて」厚紙に貼った石膏塗りのガーゼ・水彩+墨 43.5×33cm・バーゼル美術館蔵

・「クレー」エンリック・ジャルディ著・佐和瑛子訳・美術出版社・1992年12月25日—73頁

\* 「周辺ニ描ク (アド・マルギネム)」

・「パウル・クレーの芸術」—その画法と技法と—西田秀穂著・東北大学出版会・2001・72頁

\* 「周辺ニ描ク (アド・マルギネム)」

・「クレー」アート・ライブラリー・ダグラス・ホール著・前田富士男訳・西村書店・2002年・86頁

### Ⅲ 武満徹「パウル・クレエと音楽」

武満徹は、「パウル・クレエと音楽」と題して、美術雑誌『アトリエ』に執筆した。すばらしい文章である。後年に多くの感性豊かな美しい言葉で書かれた文章とエッセイはまさにここから始まったことになる。研究と考察のためにここにその全文を記す。—引用文中のパウル・クレーの表記については武満徹の記述「パウル・クレエ」に従う。

\*\*\*

パウル・クレエと音楽 武満 徹

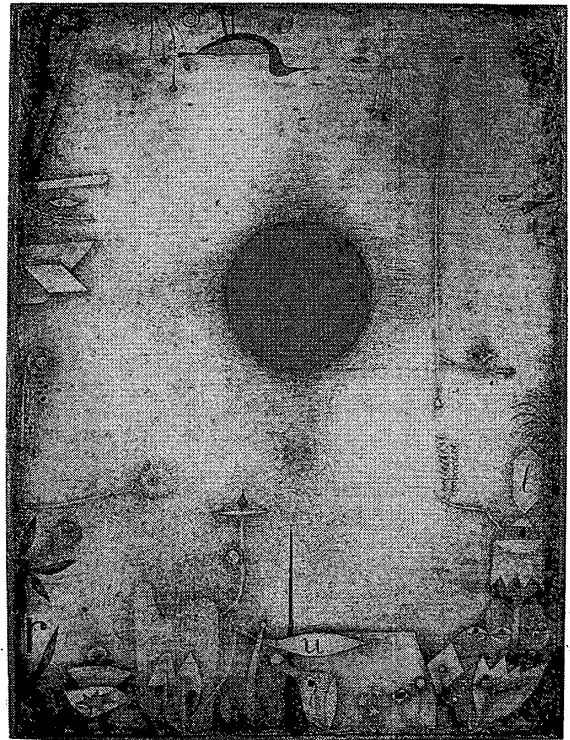
“AD MARGINEM” 効果あるピアノシモ。

この作品を前にして、たしかエドガー・ポーの〈沈黙〉という標題の短編、その中に描かれている、悪魔の呪咀を蒙ったりピアのゼイル河の不思議な風景を思い出しました。月は中空でよろめかず、雷鳴は消え、電光も閃かず、雲はじっと動かずに凝り固まり、水も平静に収まったままで、樹も揺るがなくなり、睡蓮も溜息をつかず、ひろい荒野には囁きも物音の気配とてない—

奇妙な音階が同時にヴァイブレーションを起こしたような。それもピアノシモで—

この燻んだ色調と、全体の構成からうける印象は、佛画を連想させます。しかしクレエの藝術にうかがわれる、東洋的な趣のみが、私に他の作家にまして近親性を感じさせるのだとは思いません。

彼がつくった不思議な気候に棲む人は、そして愛らしいけだもの達は、滑稽な音楽に打興じていま



周辺ニ描ク

す。時には皮肉な笑い声さえ聞こえてくるようです。その一音一音は美しく、ニュアンス<sup>2)</sup>に富んでいます。震えているような線は、しかし素晴らしいフーガに何時しか変わります。クレエの作品は、音楽が人を魅するのに似た、魔力があるように思われます。—1) ニュアン→ニュアンス

私は音に色彩があるように、色の中にも音が潜んでいるものと思っています。

アンリ・ヴァランシ等の音楽主義、またロシアの作曲家スクリアピンによって試みられた色彩オルガン、これらのナンセンスは別として、クレエは作品の中で、つつましやかに音楽と絵画を結びつけたようです。

クレエと音楽的素質については多くの伝記が語っています。彼の父親はバヴァリア生まれのすぐれたオルガン奏者であったし、母親はバールに生まれフランスで育った音楽的教養豊かな女性であったばかりでなく、クレエ自身もヴァイオリン奏者として立派な才能を示していたといわれます。また後に画家として参加したカンディンスキー等の〈青騎士〉運動に反映していた音楽性なども新しい芸術的雰囲気

として見逃すことはできません。(十二音階主義の創始者シェーンベルヒはこの運動の音楽における主要な人物でした.)。しかし私はクレエがいわゆる音楽的な画家であったとは思いません。なぜなら彼は、視覚にも、触覚にも、同じ本能的な感受性を表しているからです。

クレエの作品を見ていると、私の音楽的本能がよく揺り動かされるのを感じます。しかしそれは彼のあまりにも絵画的絵画を通して、私の中の何ものかに訴えるのです。私は、クレエの「絵画」が好きなのです。

音楽には、数学にも似た宇宙的なロジックがあります。これは概念とはちがったものです。クレエの絵画には、この意味での音楽的な必然性がリズムをもって、たえず動いていて、それがかれの幻想や神秘的な想念に、美しい秩序をあたえているのではないのでしょうか。

クレエは、中国や印度の神秘思想にも興味をもち、またポーやボードレール等を愛したといわれています。

クレエの芸術には、音楽性と文学性とがそれぞれ均衡な力で、主要な役割を果たしていますが、彼の芸術が高く評価されるとすれば、彼自身の演じた主役に就いてでなければならぬでしょう。

あのユーモアも神秘も、結局は彼の内精神からの進りであって、彼の孤高なエスプリと、創造に対する厳しい態度から、私はたえず多くの示唆を与られます。あのイズムの氾濫する時代にあって、特定のイズムとの交渉を避けたことも、それを物語っているように、私は思うのですが。

象徴的に藝術にイデオロギーを否定する弱気な人、不消化でなまのまの概念をプラカードのように持ち歩く軽薄な人。何れの時代からも、人間的にも浮いた存在だと思えますが、存外私達の周囲に多いのではないのでしょうか。

クレエは決してあの激しく動く時代から、遁れ去った隠者ではなかったのです。むしろ時代の課した多くの問題に率先とりくんで、自己のうちにそれ

等を解決していったのです。

クレエの芸術には、すべての時代に物語りかける、茶目気のある性格が見られると思います。

寡黙な彼が、羞かみながら語りかける一言には、何か底深い意味が隠されているに違いありません。

AD MARGINEMの日没時。

クレエは静かに、微笑しながら明日を予言する作家です。

(たけみつ・とおる 作曲家)

\*\*\*

#### IV 武満徹におけるパウル・クレーの「AD MARGINEM」とエドガー・ポー

武満徹が回想した『エドガー・ポーの〈沈黙〉』という標題の短編、その中に描かれている、悪魔の呪詛を蒙ったリビアのゼイル河の不思議な状景』は、エドガー・ポーの短編「沈黙」の冒頭にある記述とその情景から想起される。

『この作品を前にして、たしかエドガー・ポー〈沈黙〉という表題の短編、その中に描かれている、悪魔の呪詛を蒙ったリビアのゼイル河の不思議な状景を思い出しました。月は、中空でよろめかず、雷鳴は消え、電光も閃かず、雲はじっと動かずに凝り固まり、水も平静に収まったままで、樹も揺るがなくなり、睡蓮も溜息をつかず、ひろい荒野には囁きも物音の気配としてない—奇妙な音階が同時にヴァイブレーションを起こしたような。それもピアノシモで—』

武満徹はパウル・クレーの表現世界がポーの記述の中に彷彿とするさまを見た。

『クレエは、中国や印度の神秘思想にも興味をもち、またポーやボードレール等を愛したといわれています。』と武満徹が記したように武満徹はクレーとエドガー・ポーの表現世界を「AD MARGINEM」に見る。

「この物語の舞台は、荒涼たるリビアの僻地、ザイレ河の流れるあたりなのだが、そこには平和もそ

して沈黙もない。河の水は病的なサフラン色。海にむかって流れようとしないうで、太陽の赤い目のもとで痙攣的な不安な動きをくりかえしながら、ただ永遠に鼓動している。—

それからわたしは怒りを感じ、河に、睡蓮たちに、風に、森に、天空に、雷鳴に、そして、睡蓮たちの悲鳴に、沈黙の呪いをかけた。そして彼らは呪いにしばられて、静寂になった。そして月は天空への道をよろめきのぼることをやめ—そして雷鳴は消えうせ—そして稲光はひらめかず—そして雲たちは中空に立ちすくみ—水は沈下して水平面にとどまり—樹々はゆらぐことをやめ—睡蓮はもはや溜息をつかず—睡蓮の群れのなかからつぶやきも漏れず、そのはてしないひろがりから音声のひびく気配もなかった。—エドガー・ポー・永川玲二訳。

武満徹は『言葉の杖によって思索の歩みをすすめる』と言っているが、あらゆる創作活動において言葉は重要な意味を持っている。そしてまた、パウル・クレーの美術作品にも同じように重要な意味を持って語られている。その言葉は、題名により、また美術の言葉—造形言語によってである。

## V 武満徹におけるパウル・クレーの絵画と音楽

アメリカの作曲家ラファエル・モステルは、「美しい」という形容詞を20世紀の作曲家に捧げたいことはあまりないけれども、武満徹の音楽に関しては、この言葉がおおむね妥当なものとしてあてはまる」と述べている。—「夢の庭」ラファエル・モステル、訳・木幡一誠。

美しい音楽と美しい絵画、武満徹の音楽における創作活動の初期にパウル・クレーがいることに注目したい。武満徹が度々、パウル・クレーについて記し、語る中にパウル・クレーの創作活動を愛し、親しみ、心に深く留めている様子が窺える。

武満徹の初期創作作品の代表となるピアノ曲「二つのレント」が発表されたのが昭和25年の12月であ

る。昭和26年の1月にNHKラジオ「現代日本」の時間で藤田晴子のピアノで放送され、武満作品が初めて電波に乗った年に「パウル・クレーと音楽」は執筆されたことになる。そして実際の執筆と作曲は昭和25年、相前後する同時期に「二つのレント」とパウル・クレーと音楽」は武満徹の心と体と魂の中で奏でられた。

武満徹の創作活動初期に流れるパウル・クレーへの傾倒、クレー作品の根底を鋭く見つめる洞察力、作曲活動における絵画的性とその曙光。

それは、まさに武満徹作品に見られる静謐な「効果あるピアノシモ」がここにすでにはじまっている。武満徹におけるパウル・クレーの音楽と美術の共鳴が作品「アド・マルギネム」に静かに流れ響き渡っている。

『奇妙な音階が同時にヴァイブレーションを起こしたような。それもピアノシモで—』とパウル・クレーの絵画を見る武満徹の眼には、武満徹の音楽作品に見られる音楽と美術の共鳴が『言葉の杖によって思索の歩みをすすめる』かのように語られている。

『その一音一音は美しく、ニュアンスに富んでいます。震えているような線は、しかし素晴らしいフーガに何時しか変わります。クレーの作品は、音楽が人を魅するのに似た、魔力があるように思われます。』

その言葉は、『私は音に色彩があるように、色の中にも音が潜んでいるものと思っています。』『クレーは作品の中で、つつましかに音楽と絵画を結びつけたようです。』として語られている。

少年時代からバイオリンを良くし、生涯に渡って音楽を愛したパウル・クレーの表現世界は音楽とともにあった。

『“AD MARGINEM” 効果あるピアノシモ』

美術は目に見えるものを、見るとおりに画面に写すものでもなく、見えるものを見えるとおりに、また見たとおりに、見えたとおりの感じを表現するものだけでない。パウル・クレーの創作信条は「芸術は見えるものをそのまま再現するのではなく、見え

るようにすること」であり、私たちの目には見えないものをも、見えるように表現することであった。

画家は絵でしか表現出来ないからこそ絵を描くのであり、その他のなにものを持ってしても表現出来ないから、画家は色と形を美術の言葉として表現する。美術は色と形と素材の材質を言葉として表現する造形活動である。パウル・クレーの表現世界はまさに、色と形と素材を言葉として造形思考し、造形文法によって組み立てられた造形表現である。

『彼がつくった不思議な気候に棲む人は、そして愛らしいけどもの達は、滑稽な音楽に打興じています。時には、皮肉な笑顔さえ聞こえてくるようです。その一音一音は美しく、ニュアンスに富んでいます。震えているような線は、しかし素晴らしいフーガに何時しか変わります。クレエの作品は、音楽が人を魅するのに似た、魔力があるように思われます。私は音に色彩があるように、色の中にも音が潜んでいるものと思っています。』

『クレエは作品の中で、つつましくかに音楽と絵画を結びつけたようです。クレエと音楽的素質については、多くの傳記が語っています。』

『クレエの作品を見ていると、私の音楽的本能がつよく揺り動かされるのを感じます。しかしそれは、彼のあまりにも絵画的な絵画を通して、私の中の何ものかに訴えるのです。私は、クレエの「絵画」が好きなのです。』皆が、そして多くの人々が昔も今も、パウル・クレーが好きなのです。パウル・クレーの「絵画が好きなのです」

ここで、土肥美夫の記述に留意しておきたい。

『クレーとカンディンスキーは、性格も芸術表現の表れ方もそれぞれに個性的で異なっているが、少なくともこの点では共通しており、その意味で—バウハウス時代のいわゆる「造形思考」の理想は、静力学を超えた純粹動力学のユートピアに向けられており、それが極めて広義な、彼らのロマン主義であった—という同じ才能の根を持っているといえよう。ミュンヘンの芸術街シュヴァーピングで二軒隣に住んでいたクレーとカンディンスキーがはじめて

出会ったのは、1911年10月8日である。クレーが32才、カンディンスキーは45才であった。クレーはすぐ「青い騎士」の仲間になったが、カンディンスキーの作品について最初のうち「対象のない絵、奇妙な絵」—『日記903』と書いていて、まだ十分とらえきれずにいたようである。後ほどその当時を振り返って、「カンディンスキーの画家としての経歴はわたしのそれを上まわっていて、わたしは彼の弟子になることもできましたし、事実ある意味では弟子でした。それは、彼が書いた言葉のあれこれが励ましとなり、確証となって、私の探求に光をあててくれたからです」と回想している』—土肥美夫

クレーとカンディンスキーはドイツのバウハウスで講義したように造形言語と造形思考による美術表現の限らない可能性に意欲を持って取り組んでいたからである。

作品は、カオスのような混沌とした拮がりの中に、数学にも似た宇宙的なロジックがある。規則でない規則と武満徹が語るように『音楽には、数学にも似た宇宙的なロジックがあります。これは、概念とはちがったものです。クレエの絵画には、この意味での音楽的な必然性がリズムをもって、たえず動いていて、それが彼の幻想や神秘的な想念に、美しい秩序を与えているのではないのでしょうか。』

多くの日本人が、そして武満徹が語るように『クレエの作品を見ていると、私の音楽的本能がつよく揺り動かされるのを感じます。しかしそれは、彼のあまりにも絵画的な絵画を通して、私の中の何ものかに訴えるのです。私は、クレエの「絵画」が好きなのです』と。

パウル・クレーの作品「空間にて」をベルン美術館で見るとパウル・クレーがバウハウスで語ったようにパースペクティブの基礎を自由に展開した変則的な投影が音楽として聴こえてきます。

『寡黙な彼が、羞かみながら語りかける一言には、何か底深い意味が隠されているに違いありません。AD MARGINEMの日没時。私たちは、異口同音にひそやかな声でささやきます。

『クレエは静かに、微笑しながら明日を予言する作家です。』と。

## VI 終わりに

スイスの首都ベルンの地では、2005年の6月オープンを目指してベルン郊外に「パウル・クレー美術館」が建築中である。設計は、ポンピドー・センター、ローマのチェチーリア音楽ホール等の設計を手がけたレンゾ・ピアノ氏である。

平成11年の秋、9月25日の土曜日にベルン美術館で再会したパウル・クレーの孫・アレキサンダー・クレー氏にベルン美術館のパウル・クレー作品を案内していただきながらベルン美術館で観たクレー作品は、新たな感動を私に与えてくれた。またアレキサンダー・クレー氏からはクレー研究に多くの示唆をいただいた。

作品を前にして、新しく建設に入る「パウル・クレー美術館」構想について饒舌に語るアレキサンダー・クレー氏に出会って、素晴らしい美術館が出来る期待と楽しみをともにすることが出来た。

音楽を愛し、美術作品に感動する豊かな心の教育を人間教育の根幹として大切にしなければならない。武満徹がパウル・クレーをたたえたように美術を愛し、音楽作品に感動する豊かな心、そして繊細で豊かな感情を受け止め、持ち続けるように努めたい。

『その一音一音は美しく、ニュアンスに富んでいます。震えているような線は、しかし素晴らしいフーガに何時しか変わります。クレエの作品は、音楽が人を魅するのに似た、魔力があるように思われます。』

感性に触れ、響く、美しいもの。それが私たちが求め続けている空間である。武満徹の「パウル・クレーと音楽」は、深い思索に満ちている。今日のように原色の画集の極めて少ない時代にあつて、パウル・クレー絵画の真髄に迫る考察をした若き日の武満徹の豊かな感性の拡がりに敬服する。

本稿は、多くを島根大学教育学部紀要の「武満徹のパウル・クレー絵画と音楽」によっているが、パウル・クレー研究の継続に新しい視野を持つことが出来た。

島根大学における40年のデザインと美術教育の研究と教育に続いて、今春より鳥取短期大学に研究室をいただき研究生活を続行できることの感謝を込めて……。

## 参考文献・資料

- \* 「パウル・クレーと音楽」武満徹・月刊誌「アトリエ」1951年・昭和26年6月号・アトリエ社復活記念号p. 20-22 (p. 21-22はクレエの絵の図版。東京芸術大学附属図書館。多摩美術大学図書館。
- \* ポオ全集2「沈黙一ひとつの寓話」E.A.ポオ著・大西伊明他訳・東京創元社・1974
- \* クレー・現代美術7・全10巻・第1回配本・片山敏彦解説・みすず書房・昭和34年12月15日
- \* 「教育スケッチブック」パウル・クレー著・利光功訳・パウハウス叢書2・中央公論美術出版1991年
- \* 造形思考(上)パウル・クレー著・土方定一・菊盛英夫・坂崎乙郎共訳・新潮社1973
- \* 「クレエ」ハーバート・リード著・片山敏彦訳・著・みすず書房・昭和29年・2月15日
- \* 「パウル・クレー」フェリックス・クレー著・矢内原伊作・土肥美夫訳・みすず書房・昭和37年・5月10日
- \* 「抽象絵画の誕生」土肥美夫著・白水社・1984年7月15日
- \* 対談「クレエの音楽から享けるもの」滝口修造(美術評論家)、駒井哲郎(版画家)  
武満徹(聞く人) p. 22~42, 月刊誌「美術手帳」特集パウル・クレー, 1959年・昭和34年1月号
- \* 「音、沈黙と測りあえるほどに」武満徹著・新潮社・1971年10月20日・第一エッセイ集
- \* 「時間の園丁」武満徹著・新潮社・1996年最後の

- エッセイ集・没後刊行
- \* 「音楽」小澤征爾・武満徹著・新潮社・1981年・対談・新潮文庫
  - \* 「武満徹・音の河のゆくえ」長木誠司+樋口隆一編・平凡社・2000年3月20日
  - \* 「武満徹著作集」全5巻・編纂委員・谷川俊太郎・船山隆・新潮社・2000年2月～
  - \* 武満徹著作集5・193～195頁・新潮社・2000年・7・10
  - \* 「美術史小論集」一研究者の足跡，中村二柄著・一穂社・1999年10月20日
  - \* 日本歌曲の4代表作の歌詞の英訳及び文化的背景の解釈・狩野キャロライン・エリザベス島根県立島根女子短期大学紀要41号
  - \* 対談「武満徹と言葉」坂上弘，船山隆武満徹p. 52～57，月刊誌「波」2000年・平成12年2月号
  - \* 「武満徹・ピアノ作品集」ピーター・ゼルキン・CD：RCA-BVCC-1508；  
「夢の庭」ラファエル・モステル／訳・木幡一誠；特別インタビュー「ゼルキン，武満徹を語る」渡辺和
  - \* 「武満徹・ジェモ―他」若杉弘指揮・東京都交響楽団／CD：DENON-COCO-78944
  - \* 『子どものためのパウル・クレ―展』浜田市世界こども美術館
  - \* 「子供の領分」監修アレクサンダー・クレ―・編集日本パウル・クレ―協会・発行浜田市世界こども美術館，制作・印象社
  - \* 『子どものためのパウル・クレ―展』ニューオオタニ美術館展
  - \* 「クレ―の絵本」谷川俊太郎・1995年，講談社
  - \* 「パウル・クレ―美術館建築ツアー」スカイワード・11頁・9月号・2003
  - \* 日本パウル・クレ―協会  
URL：http://www.paul-quee-japan.com
  - \* PaulKlee-Zentrum,  
URL：http://www.paulkleezentrum.ch
- 拙著，パウル・クレ―研究—論文等を付記する
- \* 「Paul Kleeの“Padagogisches Skizzenbuch”について」—昭和47年12月・島根大学教育学部紀要・第6巻（人文・社会科学編）
  - \* 「パウル・クレ―の造形思考」—平成6年3月・島根大学教育学部紀要・第12巻（人文・社会科学編）
  - \* 「パウル・クレ―の造形思考」—昭和52年12月・島根大学教育学部紀要・第12巻（人文・社会科学編）
  - \* 「パウル・クレ―のプリミティブ」—平成9年12月・島根大学教育学部紀要・第13巻（人文・社会科学編）
  - \* 「武満徹のパウル・クレ―絵画と音楽」—平成13年3月・島根大学教育学部紀要・第34巻（人文・社会科学編）
  - \* 「パウル・クレ―の芸術」山口展—繊細で音楽的な響き・平成5年2月・毎日新聞
  - \* 「こどもたちのためのパウル・クレ―展に寄せて」山陰中央新報・平成9年1月8日.
  - \* 「パウル・クレ―美術館に期待」中国新聞社・夕刊コラム「でるた」・平成12年6月15日.
  - \* 「私のパウル・クレ―研究」潮流・日本海新聞・平成15年5月16日